

技術と倫理

— テクノロジー時代をどう生きるか —

弘前大学人文学部 五十嵐 靖彦

はじめに

近年の科学技術の進展と浸透には目を見張るものがある。直接私自身の身近な職業上の体験から言っても、ここ22年ほどの在職中の間に手書きからタイプライターへ、タイプライターからワープロやパソコンへ、さらにはパソコンを使った電子メールやインターネットの技法が普及した。この間モデルチェンジは幾度となくあった。事務は勿論電算化されたし、金の出し入れや買い物、電話もオンラインによるカード時代となった。電話については据え付け式からポケットベル、携帯式と開発された。何より驚異なのは教育研究の方法と内容に関してである。テレビ、ビデオ、OHP、スライドはもとより、コンピュータやサテライト使用の授業が珍しくない。視聴覚機器の導入が欠かせないものとなっているのである。また、今世紀半ばに遺伝情報を伝えるDNAの構造と仕組みが解明された事により分子生物学が長足の進展を示した。その結果DNAの組み替え技術を使ったバイオサイエンスがあつという間に先端研究にのし上がり、本学にも遺伝子実験施設が誕生した。今やクローン生物がSFの世界の事ではなくなっている。こうした研究は生物一般にかかわるから勿論医学でも行われており、さまざまな遺伝子治療法が開発され一部はすでに実施されている。医療界の様変わりには実は最も急激であつたと言えるかも知れない。予防と診断、治療のそれぞれの分野で理論・方法・機器のいずれもが革命的に進歩した。エコー診断、CT、MRI、内視鏡、プレネイタルダイアグノーシス、IVF-EET、顕微受精、脳死、臓器移植、等々一昔前には考えられもしなかった用語が飛び交っているのが現状である。科学や技術の分野での変化のテンポは世界観やエートス、等の内面的・精神的分野での変化の比ではない。ここにも変化があるにはあるが、何十年何百年の単位であり、しかも個人間の変異が著しい。

今回の発表は、上にみたようないさか戸惑いに似た感情をもって身近に体験されつつある高度テクノロジー社会という現実を前にして、こうした技術面での高度化の進展は、(1)社会全体にどんなインパクト・構造変化をもたらすか、(2)技術史全体の流れからしてどう位置づけられるか、(3)一方的に恩恵を与えるものとして歓迎するだけでいいのか、(4)現代人の運命的な生存条件だとするならば、我々はどんな倫理的心情をもって対処したらいいのか、等の諸問題を考察しようとするものである。

社会的インパクト

先般たまたま半ばは仕事でだが、高等学校の公民科「倫理」の教科書を数冊読む機会が

あった。何度か精読したわけだが率直に言ってその水準の高さに驚いた。特に感心した点を挙げれば、(1)環境倫理、生命倫理などアップトゥデイトな現代の倫理問題を実に手際よくまとめていること(2)現代(日本)社会の特徴を説得的に描き出していること、の2点であった。特にここで私が話の糸口として参考にしたいのはこの後者である。

あるいはこの業界でパターン化された知識となっているのかも知れないが、どの教科書にも現代社会の趨勢として、大衆社会化、情報社会化、国際化社会、高齢社会化、小家族化・少子化社会、の5項目が指摘されているのである。それぞれの傾向の特徴や定義を詳細に紹介するのが目的ではないから省くが、要するに、現代は没個性的・画一的なマス社会であり、情報環境とも言うべきさまざまな情報に取りまかれた社会であり、人・物・資金・情報の世界的規模での交流社会であり、人口に占める65歳以上の高齢者の割合が14%を超えた社会であり、少産・少子・核家族化が進展しつつある社会だ、というのである。以上の内容については、全くその通りであり、だからこそこの傾向がもたらす・あるいはすでにもたらしているさまざまな問題への対策が課題となっているのである。飛躍するようだが、昨今の学問体制の再編や大学改革の動きもこれらに対応した大学としてのリアクションだとも言える。

これらのことが図表や文献を使って高校生にも分かるように平易に説明されている。高校生にも言うより、逆に若い彼らにとっては観念的に理解するよりも感覚的な生活体験となっている事柄かも知れない。

私が述べたいのは、こうした一連の社会的変化の隠れた規定因こそは、テクノロジーの発達であり、高度テクノロジーが社会のすみずみにまで浸透した結果もたらされたものこそが、位相差はあれ世界的一般傾向としての上記の諸趨勢だ、ということである。いわば今日の社会は徹頭徹尾ハイテク社会であり、それが我々の生存の枠組みとなっており、そこから離れては生きられなくなっている。そうした生存様式の下で月日を重ねてきた結果、こうした社会傾向が生じたということなのである。

例えば、大衆社会化、という点で説明しよう。飯塚(飯塚良明『現代社会を見る眼』NHKブックス、昭和48年)によれば、大衆社会をもたらししたのはまさに近代技術である。すなわち、技術の発展が、産業化を呼び込み、都市化・人口集中・ゲマインシャフトの弱体化を招き、それがまた無機的機械的な人間関係を促進し、マスメディア・マスコミ・マスプロ・マスエジュケーションの発達とあいまって、公衆とは全く異なる大衆の支配する社会を現出したのである。公衆は教養と財産をもった固定的階層であり、精神的共通性や文化価値への関心で結合しており、彼らの意見が公共を代表した。これに対して大衆にはしっかりしたバックボーンがなく、根無し草であり、孤独・不安・無関心・平均的・部分品的・匿名性・非歴史性・無個性という性格がついてまわる。この図式は大方の承認するところであろう。大衆社会化について述べたが、他の4つの特徴についてもその規定要因がテクノロジーにあることを見届けることは難しくはない。コンピュータ技術無しには情報社会は考えられないし、通信手段・輸送手段の発達無しには国際社会化はありえない。生産力の向上による豊富な商品の供給・医療技術の進歩・破滅的な兵器や軍勢力による潜在

的な大規模戦争の抑止効果、等が平均寿命の上昇の引き金であることはこれまた明らかである。少子化傾向については、それほど直接的ではないが、栄養水準・医療水準の向上による幼児死亡率の低下、高度の生産技術・科学知識をマスターするまでの教育期間の長さや費用、を考えれば「少なく産んで上手に育てる」のが庶民の当然の対応策だろう。以上によって、現代社会をして今日の特徴をもつような社会に導いた原動力は日進月歩に歩進に歩進を重ねてきた技術革新であり、その歩みは18世紀以来不可逆的であった、と論じてあながち間違いではないだろう。

もっとも私は、いつの時代でもテクノロジーは社会から独立した自変数であり、従って歴史の推進力は技術である。といったマルクス主義ばりの技術史観をとるものではない。技術と社会は相即するし、社会やイデオロギーによって抑制されることは、キリスト教中世などを思い浮かべれば明らかだろう。ただ近代の科学技術に限定して言えば、「中立論」や「自律論」に助けられながら、そのもたらす有益性・便利さが大いに歓迎され、「科学技術の進歩こそが社会を豊かにし、人々を幸福にする」という信念が常識化しているのではないだろうか。そこで改めてテクノロジーや技術の由来について技術史的な面から位置づけを与えてみたい。

テクノロジーとはなにか

テクノロジーとは勿論、テクネー（技術）＋ロゴス（理論、学問）の事であり、強いて日本語を当てれば、科学技術ということになるだろう。だが、本来この二つは本質も由来も別個のものであった。技術とは、アリストテレス流に言えば「他のようにも有り得る事柄」にかかわる知性のうち「成果（エルゴン）のよさに奉仕する制作知」の事だが、ここから私なりにその本質性格を定義すれば、「道具や機械を設計・制作・使用して生存のための目的を達成するための手段となる能力（知識・もの・わざ）の総体」という事になる。従って、技術にとって、人間の生活上の実用目的や願望の実現のために役立つ事が至上命題であり、そうした技術の開発と案出が実践の積み重ねの中で創造されてきたのである。その意味では、プロメテウス神話によるまでもなく技術は人類発生と共に古い起源をもっている。これをふまえて、技術のキーワードを挙げれば、目的合理性、効率性、経験的、試行錯誤、勘と熟練、手段性、有用・便宜価値、古い起源、等となるだろう。

これに対して、自然哲学と区別される科学の発祥は近代である。勿論、近代自然科学といえども、自然哲学と同じ学問としての目標はもっている。それは、直接の功利性を離れて純粋に理論的関心から自然のからくりを解明したいという学問的欲求だろう。つまり究極には真理認識の獲得をもってその使命は全うされるのである。主観的に言っても認識者としての科学者の欲求は新理論の確立で満たされるのである。だが、近代科学は今一つ異質の動機を内在させていた。それは、理論的関心を究極目標としつつ、それによって得られる新知見の応用性・実用的意義については必ずしも高踏的でなかった、寛容というのでもなかった、むしろ実践的効能性を秘めた知識をこそ積極的に追求したのだ、ということである。この事を明確に述べたのは周知のようにベーコンである。かれは古代論理学の突

践上の非生産性を不可とし、「知は力と合一し」なければならないとし、そのための手順として、予断と偏見を排し、仮説を立て、しつらえられた経験（実験）を考案し検証する事が必要だとしたのである。そのための論理学が帰納法として定式化された。こうして科学的知見には、自然を解明し人間の幸福を実現するための実効的なパワーを備えること、という目標が植え込まれる事となった。それが卓見であったか謬見であったかは別としてこれは何も時代から浮き上がったベーコン個人の特異な見解ではない。カントが洞察したように、近代はまさに「実践理性の優位」したダイナミックな人間類型を典型とする時代であり、それが大航海時代を招き、地理上の発見をもたらし、ファウストの人間を産んだのである。宗教においては権威と儀式よりも信仰や勤労の価値の発見を、芸術においては画家の視点から対象を見る遠近法の確立を、医学においては形而上学的性格のガレノス医学からの解放を、哲学においてはデカルトのレス・コギタンスの発見を、もたらしたのである。これら全般的な新機運がバックとなって啓蒙運動が盛り上がっていくわけだが、その経緯を辿ることは本稿の主題ではない。

以上に見たように技術とちがいで、科学の作業場はあくまで理論領域であり、自然法則の体系的な知識の獲得を目指す知的探求であって、このことから理論的、体系的・斉合的、再現性、実証的、功利性を離れた目的自体性、真理価値、近代以降の誕生、といった特徴を指摘できるだろう。もっとも、前述のように、功利性を離れると言っても、直接的にはという事であって、原理的に生活実践から無縁の知識至上主義をとるものではない。

それでは、今日のテクノロジーはどう位置づけられるだろうか。先にも触れたように、歴史的には勿論、技術が先行した。火や石器、土器、青銅器も道具として技術の構成要素の一つである。科学者個人の的方法論上の自覚はともかくとして、恐らく近代科学といえども客観的には当時の技術を土台にしてでなければ誕生しなかっただろう事は明かである。例えば、天文学を確立するもとなった望遠鏡、生物学促進の欠かせぬ手足である顕微鏡、近代医学を促進した聴診器、これらはいずれも当時の技術界にあった小道具である。こうして技術が科学を促したというのは一面の真理である。しかし、ひとたび科学が成立するや、こんどはそれを応用した技術が発達したというのが他方の面でもある。種々の力学的知識の応用としての内燃機関の発達、弾道学の応用としての銃火器の開発、等多くの事例がある。今日では、両者が相互に影響しあい、因一果、理論一応用、が必ずしも一方的でなく双方向的であり、一体化しているのである。つまり科学技術という一つの現象になっているのである。このことは工学部という学問集団に象徴されている。これがテクノロジー化した技術であり、テクノロジー化した科学であり、この一体化した分野が今や文明の推進力として社会を動かし、生活様式を決定しているのである。先述のように本来的には技術と社会は相互規定関係をなしており、必ずしもテクノロジーが一方的に社会を動かしているわけではないはずである。今日とてもそうした相即はある意味では貫徹している。この「ある意味」の詳しい説明は次節に譲るとして、ここでは近代社会と技術の特殊な関係を押さえておくにとどめたい。近代の科学技術を取りまくフレームワークを全体としてみれば、それがテクノロジー側に有利に働いていることは瞭然としている。すなわち、近

代社会は自由主義の原則が確立した社会であり、政治的には民主主義、精神的には思想・学問・信教・表現等の自由、経済的には自由な経済活動をもととした資本主義の社会である。こうした体制下において科学者や技術者は国家権力や宗教的権威に煩わされることなく、自由競争に勝ち抜くための技術革新に邁進できる仕組みとなっているのである。こうしてテクノロジーの高度化こそは営利目的の最大の貢献者であり、まさに技術様様という評価がほぼ定着しているのである。今や技術中立論や自律論が唱えられ、それが悪用されない限りは、そのもたらす有益性・便宜さは社会を豊かにし、人々を幸福にするという信念が常識化しているのである。そこで改めて、今日の我々にとってのテクノロジーのもつ意味を問い直してみたい。

テクノロジー社会の問題性

ゲーレンは、後期シェーラーの着想を継承しつつ経験的な総合科学としての哲学的人間学を打ち立てようとしている。技術論はその重要な構成部分である。彼にとって技術は人間にとってどのような意味をもっているだろうか。彼は生物としての人間の欠陥性という点から技術の不可欠性を説く。すなわち、人間は動物の中で最も不完全な本能と器官の持ち主であり、「欠陥存在」である。感覚において散漫、武装において丸裸、その全体質は胎児的、本能は不安定、特定の自然環境への先天的適応能力の欠如、等が人間のいわばアプリオリな事実性である。人間は任意の自然状態を前にしてこれを行為的に改変する事によってしか生存できない文化的存在であり、この事自体は選択の対象ではない。こうした自然の人間化のための諸手段の総体が技術であり、技術史は人間史とオーバーラップする。この視点から彼は、技術の種類（代償技術、強化技術、負担免除技術）、道具・機械の歴史（道具、労働機械・原動機、自動機械、の諸段階）、素材史（石、木、青銅、鉄、合成物質）、文明史（狩猟採集、農耕遊牧、現代産業文明）、等を詳述している。問題は現代テクノロジーの問題性についての発言である。これに関してはそれほど歯切れよく指針を与えているとは言えない。彼にとって技術は人間の生存にとっての必要条件であり、それ無しには人間は生きられない。技術は人間の発生と共に出現し、徐々に進歩を遂げ今や近代技術に到達した。ここでは道具から機械へと移行している。近代科学との提携と資本主義的生産様式とがそれを加速した。それは一つの決定的な質的变化であり、文明全体の構造変化であった。今や現代文明は文明の絶対域に踏み込んでいる。つまりそれは便利な道具であると共に一歩間違えば破滅をもたらしかねない致命的な武器であるというヤヌスの双面をもつに至っているのである。自らを暖めるために燃やした火が身を焦がすほどの強火になっているのである。「この劫火によって何が焼かれ、溶かされて姿を変え、何が抵抗の実を示すか、今それを言うことはできない。」

こうしてわれわれはゲーレンの所説を手がかりに、テクノロジー社会の到来が人間にとって避けられない道筋であること、またこの先々どうなっていくのかは予知できないこと、また、高度テクノロジーが我々にとって功罪・益害のアンビバレンツな価値をもっている事などを確認した。確かに技術は有用であり、それから逃れることが場合によって最高の

贅沢になるほどにわれわれは技術に絡めとられている。この先どうなるのか一抹の不安を覚えつつもテクノロジー依存の生活は続行しなければならないだろう。人類史の巨視的観望においては、結局は不可知論しか成り立たないかも知れない。

ところでゲーレンとは違った角度からテクノロジー時代の問題性を扱ったのは今道である。技術時代の「魂の」危機、という点ではむしろ彼の方が明快と言えるかも知れない。今道は自然環境と技術連関という2つの環境を区別する。自然環境は言うまでもなく、海洋・大気・森林・河川・湖沼・台地・気候などの自然的諸条件である。これに対し技術連関とは、道具や機械が高度に発達した結果、それらが単独性を失い互いに緊密に結びつき一つのシステムになっている状態を指す。例えば自動車という文明の利器があるが、それは単純に孤立しているわけではなく、それを作るための多くの関連産業、動くための道路網、採掘・精錬・輸送・販売などの燃料供給システム・交通法規体系、開発研究分野、業界利害の政策への反映システム、等々が網の目のように張り巡らされている。同じことは任意の電化製品やコンピュータについて言えるだろう。こうして我々は好むと好まざるとにかかわらず、技術連関に巻き込まれているのが現状である。

こうした状況では我々の行為は転倒した論理構造をもつと今道は指摘する。アリストテレス以来、行為は以下のような倫理で決定されていた。

大前提……私はAを実現したい（目的の措定）。

小前提……Aを実現する可能性のある手段はP, Q, R等いくつかあるがそのうち最も容易で、格好もいいものはPである（手段の選択）。

結 論……よって私はPを行いAを実現しよう（行為の決定）。

ところが今日では以下のようにして行為が導かれる。

大前提……我々にはPという手段がある（可能手段の確認）。

小前提……PによってA, B, C等いくつかのことが実現可能であるが、このうちAを実現するのが最もコストも安く効率的でもある（目的選択）。

結論……よって私はPを行いAを実現しよう（行為の決定）。

ここには高度テクノロジー時代における目的－手段の系列の逆転が描き出されている。確かにある新技術の開発は発生史的には誰かのあるいは社会の何らかのニーズ、デマンドに応じたものであったかもしれない。というのは無用の道具というのは背理であるから。だがひとたび確立するやその新技術が相対的に独立し、拡大応用され、逆にそれが人々の欲求や願望をかき立て掘り起こし、また創造していく事にもなる。例えば集積回路の発明はコンピュータ社会を産み、ゲームソフトに応用され、子どもの遊びを一変させた。次々と発売されるゲームソフトを待ちこがれるようになった。自動車や家電製品等必要は必要だが、流行だからとか、持っていないとみっともないとか、宣伝に乗せられてとかで買う場合もあるのではないか。生殖医学の革命的進歩は子どものいない夫婦の心理に決定的な影響を与えた。それなりに心穏やかに過ごしてきたのに焦りや迷いを感じだした夫婦がいるかも知れない。また、臓器移植療法の開発は待機患者をして脳死の人を待ち望む気持ちを喚起しないとも限らない。

事ほどさようにテクノロジーが我々の心理や慣習、制度、価値観などを変え我々が益々それに振り回されるようになっていく事、人生最大の目的とされる欲求の実現としての幸福そのものがテクノロジーの支配下におかれる事、これこそが「魂の」危機以外の何者でもないであろう。

魂の危機は内面的に深く進行する病理現象だが、高度テクノロジーの普及はもっと直接的な形で我々の心身を脅かし始めている。社会や人類にとっての当面の課題という点ではこちらの方が緊急かつ深刻な問題かも知れない。それらは言わずもがな、環境問題と生命操作技術にかかわる問題である。環境問題とは、高々ここ200年ほどの間の産業技術時代の経過によって地球環境の劣悪化が進み（地球温暖化、酸性雨、オゾン層の破壊、熱帯林の減少、砂漠の拡大、絶滅生物種の増加、激増する廃棄物、放射能汚染、天然化石燃料の不足、人口増加に追いつかない食糧生産、等）、このまま手を拱いていては、人類のみならず地球という生物圏そのものが死滅するのではないか、ということである。これに対して、エコロジストと呼ばれる人達は深淺はあれ種々の提言をなしている。また、すでに世界的規模での対策が着手されているが必ずしも解決のめどは立っていない。なぜなら、何らかの行動計画を立案し実行しようとすれば、個人、企業、国家、現在世代、人類、のそれぞれの段階の「エゴ」が立ち上がるからである。ここには自由主義の原則そのものの再検討が迫られ兼ねない事態が伏在している。

他方、生命操作技術の長足の進歩は、この技術の行使に伴う倫理問題を提起せずにはおかない。DNA組み替え技術は、人類が神に代わり新しい生物種の創造能力を持った事を意味する。人類に有益な動植物の改良育成、遺伝病の治療など多くの恩恵をもたらすが、バイオハザードの危険と背中合わせであり、諸刃の剣と言わざるを得ない。人類自身のアイデンティティの流動化を招く恐れすらある。また延命医療技術の進歩は、死の定義、QOLの再吟味を不可避ならしめたとし、生殖医療の革命的進歩は胚、胎児、性、家族、世代等をめぐる法的・倫理的常識を揺るがしかねない問題を含んでいる。

以上要するにテクノロジーの高度化は、多くのゆとり、省力化、豊かさを与えてくれることによって虜として我々をその連関の中に取り込みつつ、他方ではその代償として我々自身の心身、精神、家族、社会、環境、等に否応なく新たな問題を創出していく、誠に悲劇的な進展であり、ゲーレン流に言えばこの過程は不可逆的であり、その未来の予測は不可能だと言うわけである。にもかかわらず我々はこの時代を生きなければならない。どのような心術を持って臨んだらいいのだろうか。

テクノロジー時代をどう生きるか

中野（孝次）は、本阿弥光悦、鴨長明、西行、吉田兼好、芭蕉、良寛、等、日本文化史上、簡素な風雅の道を貫いた一群の人々の生きざまをとりまとめ、『清貧の思想』（中野孝次、草思社、平成3年）と題して世に出した。彼らはそれぞれ分野は異にしつつもみな、世俗的な栄達や名利、富貴を求めず、心の清音な生活に憧れ簡素を旨とした人々である。庵のような小さな住居、最低限の家財道具、質素な身なり、粗末な食べ物、そして何より

もおごりを慎み乏しさの中に安息を見いだす心の在り方。こうした清貧の倫理が彼らに共通している。大量生産と大量消費、飽食と使い捨て、油断と欠乏感の生活に明け暮れる現代人に対する、シンプルライフを忘れるな、との警鐘であろう。もっともこのような清貧の思想は日本人特有のものと言うわけではなく、例えば西洋にも、古くはストア派（アデアフォラ）やエピクロス派（アウタルケイア）、近代でもルソー（自然へ還れ）やカント（リゴリズム）、等これと類似の倫理観は少なくない。インドや中国にもあるだろう。

我々は、とかく物質的な財貨や感覚的快樂の中での欠乏と充足の悪循環に陥りがちであるが、それと対照的なこのような清貧の倫理を前にするとき、遠く忘れかけた心の原点に触れる思いがする。一も二もなく原則的な精神態度として受け入れ大事にしていきたいものである。とはいえ、現実的にそれを実践しようとするとなかなか難しいことであることに気付く。彼らはいわば世捨て人の系譜であり、芸術活動という点は別として、現代では蒸発者やヒッピー、ホームレスに近いのではないか。ドロップアウトがすべて悪いわけではないが強いて薦められることでもない。また、山里に庵を結ぶにしても天然の材木や運送の費用がかかり高くつくこともある。今日では質素で自然の生活がかえって贅沢であるような事が少なくない。つまり自然を買わなければならないほどに人工化が進んでいるからである。それやこれやを考えれば、我々は最先端のハイテクを新し物好きに追い求めず、昔の先端技術であった物を大事に使いこなしていく事が清貧の思想に近い生活態度と言えるのではないか。

それにしてもテクノロジーの進展そのものにブレーキをかける事は出来ない。と言うのはブレーキをかけるためにまたテクノロジーが必要だからである。とすれば、できるだけ許容できるテクノロジーだけを厳選して導入するよう絶えずチェックするというのが、これまで指摘した問題性を回避するための現実的な対応という事になる。それが実践的対策としての、テクノロジーアセスメントであるが、その評価基準は以下の項目を含むと考えられる。

- (1) 安全性…健康や生命にとって危険性がないこと
- (2) 効能性…期待される効果があること
- (3) 最善性…他にもっと有効な手段が見当たらないこと
- (4) 合法性…少なくとも明白な実定法違反でないこと
- (5) 必要性…社会的ニーズ・需要に対応したものであること
- (6) 将来性…それによる当該社会または未来世代に悪影響が予測されない
(凍結精子・卵・受精卵、等の生殖年齢以後の使用の禁)
- (7) 自然性…異常（不自然）を正常（自然）に復す意味があること（筋肉増強・男女産み分け・美容整形、等は問題）
- (8) 経済性…資源希少化時代を控えて費用対効果の問題は避けて通れない

仮に一個人、一企業、一国の名誉、利益、威信にとってプラスであるとしても、社会や人類、未来世代にとってマイナスとなるようなテクノロジーは研究であれ実用化であれ抑

制することが大事である。これらの項目に沿って吟味すればそれが可能と考えられる。

実はこれまで述べた事にすでにながしかは含まれているが、テクノロジーアセスメントでもっと大事な事は、テクノロジーそのものに対する我々の基本的スタンス、哲学である。ゲーレンの文明の絶対域としての現代技術観、中野の文明に溺れぬ清貧の思想、これらをふまえ私は、テクノロジーの両義性を了解している事、を挙げたい。ここで言う両義性とは、例えば道具や機械は有用であり便利であると共に使い方あるいは使う人いかんでは致命的な武器ともなる、といった在り来たりのこととも違う。これは当然の事であってアセスメントですでに精査されるだろう。両犠牲とはテクノロジーの進歩をどのように観ずるにかかわる。確かに、テクノロジーの本領は日進月歩の変化にあり、これは通常発達とか進歩とか言われる。つまり昨日まで大変な労力を要した事、不可能だった事、願望や夢に留まっていた事、等が可能になったり省力化できたりしていくことだからである。この事から楽観的な進歩史観、技術善玉論もあるいはでてくるかも知れない。これでは競争馬の論理であろう。早く走るのはいいがルール違反は失格だから宥めよう（アセスメントでチェックしよう）。両義性を知る者は必ずしも早さをよしとしない。なぜなら、テクノロジーの進歩はいつの場合にも古いものの忘却・喪失を伴う事を知るからである。何かの出現は何かの隠れでもある。ワープロやパソコンの普及は名筆家の出番を少なくしたし、識字力を低下させた。新幹線の発達は旅のロマンを変質させたし多くの町を過疎に追いやった。宇宙船が月に到着する時代になって童話の書き換えが必要となった。要するに技術が刷新されるごとに古いものが廃棄されていくのである。誤解を避けるために言えば、私は、古いものが捨て去られるのは忍びないとか、古いものの中にも捨て難いものがあるとか、の事を言おうとしているのではない。今あるものがテクノロジーの刷新によって古いものという格付けを否応なくされていく、その論理構造の事を言っているのである。テクノロジー時代にあつては、現在が現在として十分に享受され権利主張するまもなく直ちに過去に追いやられるその理不尽さを言うのである。そのテンポを止める事は許されない、出来得れば早ければ早いほどよいというのがテクノロジーの要請である。そしてその流れに乗らざるを得ないのが我々の宿命でもある。とすれば我々にできる事は、あたかも自転車遅乗り競争のように、一応前向きにつき合いながらもできるだけテンポを遅らせるために、アセスメントを厳しくし、程々の文化生活に甘んじる事ではないか。

マックス・シェーラーは20世紀を色々な意味での不均衡・対立が緩和されていく調和の時代と位置づけた。高度テクノロジーが世界を覆う事によってある意味では的中している。それが、彼が最も高い価値をおき望んだ「愛の連帯」によってではなく、最も低い序列を与えた「有用価値」によってである事は皮肉な事である。「最も低い価値は最も強い価値であり、最も高い価値は最も弱い価値」であるとすればそれもまた当然かも知れない。

〔本稿は、平成9年9月27日に開催された第32回弘前大学哲学会大会で筆者が行った、同題の公開講演を原稿化したものである。時間的な余裕がなく、本誌収録に当って加筆・訂正はせず、ほぼ草稿通りとなっている。〕

参考文献

- 岩波講座 現代思想13『テクノロジーの思想』（岩波書店，1994）
名古屋大学公開講座『現代技術を考える』（名古屋大学出版会，1983）
三枝博音『技術の哲学』（岩波書店，1951）
Henk A.M.J.ten Have, Medical Technology Assessment and Ethics,Hastings Report, September-October,1995.
A.ゲーレン 平野訳『技術時代の魂の危機』（法政大学出版局，1986）
加藤尚武『環境倫理学のすすめ』（丸善ライブラリー1993）
中野孝次『清貧の思想』（草思社，1992）
今道友信『エコエチカー生圏倫理学入門』（講談社学術文庫，1990）
飯塚良明『現代社会を見る眼』（NHKブックス，1973）
杉田，岡崎，輪田編『現代の思想』（金港堂，1996）
城塚，片山，星野著『現代哲学への招待』（有斐閣，1995）
立花 隆『エコロジー的思考のすすめ』（中公文庫，1990）
北村 実『環境倫理学の問題点』（早大哲学会『PHILOSOPHIA』，1994）
Max Scheler, Philosophische Weltanschauung, Max Scheler Gesammelte Werke,Bd. 9
Spaete Schriften, 1976.
五十嵐靖彦「テクノロジーの進歩と人間の幸福」（『セミナー医療と社会』第14号，1998）